

# 「ふれあいサロン」による地域コミュニティの活性化

北海学園大学 経営学部教授 菅原 浩信

## I. はじめに

### 1. 問題意識

近年、地域コミュニティ<sup>1</sup>の疲弊・縮小に伴い、限界集落の急増、買物弱者の出現、高齢者・障がい者の孤独死といった様々な問題が出現している。一方、前述した高齢者・障がい者の孤独死だけではなく、子供に関わる事件・事故の増加等を背景として、安全・安心に暮らせるまちづくりが求められている。また、とりわけ東日本大震災の発生以降、地域住民の間で、横のつながりや絆といったものが重視されている。こうしたことから、地域コミュニティの役割が見直されつつあり、その活性化が急務とされている。特に、広域分散型で、人口密度が希薄な北海道においては、他都府県に比べて急速に人口減少が進展している<sup>2</sup>こともあり、地域コミュニティの活性化は早急に取り組まなければならない課題である。

ここで、地域コミュニティの活性化とは、地域コミュニティにおいて、①人と人の「出会い・集い」が生まれ、②「出会い・集い」が継続的になっていくことによって「交流・ふれあい」に発展し、③「交流・ふれあい」をもとに「ネットワーク」が形成され、④「ネットワーク」による諸活動によって、新たに人々が集まり「にぎわい」が創造される、という一連のプロセスの結果としてもたらされるもの（菅原（2013b），p.38）とする。

これより、地域コミュニティの活性化を図っていくためには、まず、その第一歩として、人と人の「出会い・集い」の場が必要となる。こうした役割を継続的に担うことのできるものの1つとして、コミュニティ・カフェがあげられる。

コミュニティ・カフェは、例えば、「人と人がつながることを大事にする、行くとほっとできる場所」（社団法人長寿社会文化協会（2007），p.5）、「営利を求めめるだけでなく地域やその地域に住む人たちのための活動を目指す『場』（富山居場所&コミュニティカフェネットワーク・公益社団法人長寿社会文化協会（2010），p.4）、「食や文化を通して地域のコミュニティの場として縁を広げることを目的としたカフェ」（Hokkaido コミュニティ Cafe クミアイからの提供資料）のように、様々な定義がなされている。これらをふまえ、ここでは、コミュニティ・カフェとは「飲食やイベントが提供される、主として地域住民

<sup>1</sup> 地域コミュニティの範囲は、「地域」の単位をどうとらえるのかによって異なる。地域単位としては、例えば、都道府県、市町村、校区、投票区、農業集落等があげられている（埴淵・市田・平井・近藤（2008），p.64）。本稿では、地域コミュニティの範囲を、地域住民の間で横のつながりや絆が形成される範囲として適当と考えられる小学校区としてとらえる。

<sup>2</sup> 北海道の人口減少数（2010～2015年）は123千人と、47都道府県で最も多くなっている（総務省統計局『平成27年度国勢調査人口速報集計結果』（<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/pdf/gaiyou.pdf>）（2017年3月19日アクセス））。

の居場所・たまり場」(菅原 (2013a), p.43) とする。

コミュニティ・カフェは、その機能によって、①一般のカフェと同じように、「飲食の提供」を重視するもの(「狭義のコミュニティ・カフェ」)、②「イベントの提供」を重視するもの(「コミュニティ・スペース」)、③「居場所・たまり場」を重視するもの(「地域の茶の間」)、の3つに分けることができる(菅原 (2014), p.61)。

コミュニティ・カフェが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、地域住民が集まりやすく、その「出会い・集い」が容易であるとともに、それが「交流・ふれあい」へと発展しやすい場であることが求められる。したがって、前述の機能別の分類の中では、もともと顔見知りであることの多い地域住民が比較的集まりやすく、「交流・ふれあい」につながりやすい「地域の茶の間」が、地域コミュニティの活性化において重要な役割を果たしうる。

新潟県内には2,143ヶ所の「地域の茶の間」が存在しており<sup>3</sup>、そこでは、高齢者同士はもちろん、様々な世代間での「出会い・集い」や「交流・ふれあい」が生まれており、中には「ネットワーク」の形成や「にぎわい」の創出がもたらされたものも存在している。

例えば、2013年3月末で活動を終了したが、新潟県内でも代表的な地域の茶の間とされていた「うちの実家」では、もともと小学生が授業の一環で訪問(「地域の宝探し」等)していたこと(=「出会い・集い」、「交流・ふれあい」)をきっかけとした小学校とのつながり(=「ネットワーク」の形成)があった。ある時、小学校の先生から「14時に授業が終わる日があるが、親が仕事をしている児童は行き場がない」という相談を受け、「うちの実家」で行われていた介護実技を受講していた高齢者がボランティアとして子供の面倒をみる「子供の茶の間」をスタートさせたところ、小学生が継続的に訪問するようになり(=「にぎわい」の創出)、高齢者と小学生が顔見知りになり、地域であいさつを交わすようになった<sup>4</sup>。

こうした「地域の茶の間」の1つに、北海道内の町内会・自治会が主体となって運営する「ふれあいサロン」があげられる。一般社団法人北海道町内会連合会(以下、道町連)は、1990年度から、北海道社会福祉協議会、北海道共同募金会との三者提唱により、「ひとりの不幸もみのがさない住みよいまちづくり全道運動」(以下、全道運動)を展開している。この全道運動は、単位町内会および地区連合会を実践地区として実施される、①交流活動、②在宅福祉サービス活動、③啓発活動、④調査活動、⑤ネットワークづくり、⑥マンパワー養成、の6つの実践活動に対し、道町連から活動費として年間3万円(単年の場合)の助成を行うというものである。2015年度の全道運動では、74の実践地区において実施される84の実践活動(事業)に対し助成が行われている。

この6つの実践活動のうちの交流活動の1つであり、2015年度の全道運動において最も多く取り組まれた(84事業中19事業)のが、ふれあいサロンである。ふれあいサロンは、「身近な地域の町内会館などを拠点として、高齢者の生きがいや社会参加、健康づくり、閉じこもり防止を目的に高齢者と町内会の福祉部員などが一緒に企画・運営しながら、茶話会やレクリエーションなどの活動を定期的で開催し、楽しく、気軽に仲間づくりを行う

<sup>3</sup> 新潟県福祉保健部高齢福祉保健課からの提供資料による。

<sup>4</sup> 詳しくは、菅原 (2013b), p.43。

活動」(一般社団法人北海道町内会連合会(2016), pp.3-5)であり、前述のコミュニティ・カフェの3つの機能のうちの「地域の茶の間」に該当するものとして位置づけられる。

一方、介護保険制度の見直しの1つとして、これまで予防給付の中で実施されてきた要支援者の訪問介護や通所介護が、2017年度までに、市町村による「新しい介護予防・日常生活支援総合事業」(以下、新しい総合事業)へ移行することとなった。この新しい総合事業は、前述の訪問介護(訪問型サービス)や通所介護(通所型サービス)と、介護予防・生活支援サービス対象者向けの生活支援サービスで構成されているが、そのうち、自治会単位の圏域における生活支援サービスの1つとして、コミュニティ・カフェや交流サロンが位置づけられている。その担い手としては、NPO法人や協同組合等も想定されているが、より地域コミュニティに密着した活動を行っている町内会・自治会が、最も適切な担い手であるといえよう。

したがって、町内会・自治会が運営するふれあいサロンは、今後、この生活支援サービスの1つとして機能することが求められる。そのためには、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化をもたらす、そこに人が集まってくる必要がある。

## 2. 先行研究

ふれあいサロン(主として各地の社会福祉協議会が推進している「ふれあい・いきいきサロン」を含む)に関する先行研究は数多く存在しているが、大半は地域福祉の分野におけるものであり、さらにその多くは現状の紹介や課題の提示にとどまっている。

しかし、例えば、「現在の『ふれあい・いきいきサロン』に求められているのは、対象者である高齢者の『介護予防』というよりも、担い手である地域住民同士の交流による『地域づくり』の機能ではないだろうか」(黒岩(2004), pp.97-98)、「高齢者を対象にした『ふれあい・いきいきサロン』の意義は、高齢者を個人単位で理解し、その生活を豊かにしていく意義を持っているものであると同時に、地域社会を構成する一員である高齢者同士のつながりを再構築する場としての地域社会づくりの意義も併せ持っているといえる」(豊田(2008), p.19)等の指摘をふまえると、ふれあいサロンの分析に際しては、地域福祉の視点に限らず、地域コミュニティの活性化の視点が求められているといえよう。

ふれあいサロンによる地域コミュニティの活性化に関する先行研究としては、例えば、「サロンは高齢者にとっての居場所になっており、よい効果を生み出し、地域のコミュニティの場になる可能性がある」(桧垣・福田(2005), p.316)、「サロン活動は総じてその参加者に対して人と知り合うきっかけや人との交流を提供しており、それがより深い人間関係へと発展するケースもみられる」(森(2008), p.97)、「サロンは、その活動価値と存在価値からコミュニティ拠点となりうる」(中村(2008), p.26)、「サロン活動は地域社会での日常生活における人間関係の形成に寄与する可能性がある」(森(2014), p.268)等があげられる。

しかし、これらは、ふれあいサロンの存在が地域コミュニティの活性化につながる可能性について言及しているにすぎず、ふれあいサロンによる地域コミュニティの活性化に関して具体的に言及されたものは見当たらない。

### 3. 研究目的

そこで、本稿では、主として町内会・自治会が運営するふれあいサロンが、①どのようにして地域コミュニティの活性化を図っているのか、②今後、どのようにして地域コミュニティの活性化を図っていくべきか、の2点について、具体的に明らかにすることを目的とする。

### 4. 研究方法

本稿では、まず、2014～2015年度に道町連から助成を受けているふれあいサロンのうち、地域コミュニティの活性化に寄与していると考えられるものについて、以下の2つの基準を用いて抽出した。

- ①世代間交流が行われているふれあいサロン
- ②おおむね月1回以上開催されているふれあいサロン

このうち、①については、「異世代との短時間の交流や高齢者自身もつ知識を子どもたちに伝えることが高齢者の『生きがい』に影響を与える」（椎名・朴（2009），p.251）、「若いエネルギーが加わりサロンの場に普段とは違う活気が生まれ、高齢者の方々の気持ちを高揚させた」（森永・後藤・江川（2011），p.31）、「サロンは世代を問わず、つながりを作る場の提供であるのはまちがいない」（松井（2014），p.92）等の指摘から、ふれあいサロンにおいて世代間交流が行われることにより、幅広い「交流・ふれあい」が生まれ、その結果として地域コミュニティの活性化に寄与すると考えられることによるものである。

また、②については、「年1回程度のサロン活動では、十分な効果が期待されにくい」、「少なくとも月に1回以上程度の開催頻度が必要と思われる」（以上、高野・坂本・大倉（2007），p.135）、「月1回、週1回、どちらのサロンも幅広い年代で、身体状況は元気な方、要介護者、障がいのある方、更には、子育て中の方まで、いろんな状況にある方々が参加していた」（松井（2014），p.92）等の指摘から、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化に寄与するには、少なくとも月1回以上の開催が必要であると考えられることによるものである。ただし、北海道の場合、冬期（とりわけ1月～2月）においては、積雪や歩道の凍結等により、徒歩での高齢者の参加が難しいことから、ふれあいサロンを開催しないケースが散見される。そのため、冬期を除いて、毎月開催されるふれあいサロンについても、抽出の対象とした。

次に、前述の2つの基準により抽出されたふれあいサロンについて、当該ふれあいサロンを運営しているメンバー（町内会・自治会の役員、ボランティア・スタッフ等）に対するインタビュー調査を行うとともに、当該ふれあいサロンに関する資料等の収集・整理・分析を行った。その結果、最終的に18ヶ所のふれあいサロンを分析対象事例として取り上げることとした<sup>5</sup>。

これら18ヶ所のふれあいサロンにおける概要（①設立までの経緯、②果たすべき役割

<sup>5</sup> ただし、登別本町2町会については、2014～2015年度に道町連からの助成を受けていないが、他のふれあいサロンに比べ開催頻度がきわめて高い（週5回）ことから、分析対象事例の中にも含めることとした。

(目的、ねらい)、③運営方針、④活動内容、⑤運営に影響を及ぼす団体・個人、⑥運営体制、⑦成果、⑧継続できた理由、⑨問題点・課題、⑩今後の方向性)については、表 1-1～1-9 に示す通りである。

## Ⅱ. 分析枠組

前述のように、ふれあいサロンによる地域コミュニティの活性化についての具体的な分析が見当たらないことから、本稿における分析枠組としては、コミュニティ・カフェによる地域コミュニティの活性化についての分析枠組(菅原(2013b)、菅原(2015))を一部改変の上、採用するものとする(図1)。

なお、具体的な分析枠組の内容については、以下の通りである。

①まず、ふれあいサロンは、様々な魅力(例えば、プログラムや雰囲気等)を提供する。それを好ましいと感じる、主として地域の高齢者が参加するようになる(「心の拠り所となる感情的な場」(飯田・初見(2008), p.332)、「サード・プレイス」(入川(2012), p.30)として)。

②やがて、ふれあいサロンの中で、参加者同士の「出会い・集い」が生まれるようになる。そのことを契機として、参加者が継続的に参加するようになる(「居心地の良い場」(桧垣・福田(2005), p.316)、「居心地のいい場」、「場の愛着」(以上、飯田・初見(2008), p.332)、「活動の拠点」(入川(2012), p.30)、「居場所」(坂倉・保井・白坂・前野(2013), p.29)となる)。

そして、ふれあいサロンの参加者は、その参加頻度に応じて、ふれあいサロンでの知り合いが増加する(「家以外の場所で人との関わりを持つ大切な場所」(桧垣・福田(2005), p.316)、「他者との接触がある集団的な場」(飯田・初見(2008), p.332)、「人と知り合う機能」、「人との交流を提供する機能」(以上、森(2008), p.97)、「自分らしさへの自覚」(坂倉・保井・白坂・前野(2013), p.29)、「面識縁」(徳村・大江(2008), pp.170-171))。

③それに伴い、ふれあいサロンでの「出会い・集い」が、「交流・ふれあい」へと発展していく。そうすると、地域コミュニティにおける様々な情報(とりわけ主たる参加者である高齢者に関する情報)が集約されていく(「情報を共有する、人的ネットワーク拠点」(中村(2009), p.35)。また、そのことによって、「新たな文化の創造や発信」(入川(2012), p.30)がなされたり、「利用者のストレングス(意欲・能力・自信・嗜好)の活用」(椎名・朴(2009), p.252)が可能になったりする)。

また、何らかの共通の目的(例えば、おしゃべり、麻雀等)を持った参加者がふれあいサロンに集まったり、ふれあいサロンの中で結びついたりするようになる(「多様な利用者の訪問を促し」、「利用者同士の関係性が深まるような『交流』」(以上、飯田・初見(2008), p.332)、「コミュニティ・ハブ」(入川(2012), pp.30-31)、「より深い人間関係へと発展」(森(2008), p.97)、「選択縁」(徳村・大江(2008), pp.170-171)。その結果、「運営協力等の行動を試行する」(坂倉・保井・白坂・前野(2013), p.29)ようになる)。









表 1-5 分析対象事例の概要 (5)

岩見沢市・やまと町内会		登別市・美園町内会
設立までの経緯	平成22年1月 認知症予防講演会を受講(会長 総務部長)⇒その後、地域でできる認知症予防研究会に参加 認知症の地域での予防の重要性を認識、すでに実施している町内会もある⇒やまと町内会でもできないかと考えた 民生児童委員は地域で様々な活動を行っているが、保健推進員はこれといった活動がなかった 民生児童委員と保健推進員でサロンの実施に向け非公式に話し合いを行う⇒最初は乗り気ではなかったが、平成23年2月朝びやめてみよう…となる どこかやってみようということで、民生児童委員や保健推進員が中心になり、平成23年2月2日、町内会役員、民生児童委員、保健推進員、保健センター健康指導員の16名でサロン設置準備打ち合わせを開催⇒町内会(南町1丁目)のサロンを3月15日にサロン定立上げ つながりが希薄⇒実施時にどうするか不安 異世代交流については、平成23年2月の町内会総会長会議で、子どもたちに日本の伝統文化(習字・書道)の良さ伝えていこうと、お祭りや行事も、保護者の異世代交流会を事業計画に盛り込んでほしいという声もある⇒平成26年度の町内会定期総会で承認され、以後毎年開催(今年はコロナウィルスの影響で懸断は中止)	社協からサロンをやらないかという呼びかけがあり、「みんなでいきサロン」としてスタート(平成15年)
果たすべき役割	市の文化センターでの講演会の話がきっかけで、認知症予防事業としてスタート(前掲)	・独居高齢者に限らず、地域の中の結びつきを深める場
運営方針	「笑って、楽しんで、帰るのがホトト」 ・サロンのほかには「やまと町内会」(毎月15日と月末に独居高齢者や高齢者のみの世帯を見守り⇒何かあったら民生委員に連絡する仕組み)、「やまと見守り隊」、小学生の通学見守り	・独居高齢者が孤立しないように ・1人でも多く参加してほしい ・同じ趣味や趣味ではダメ⇒気軽に楽しむ、ひとことでも発信して寂しくなって帰ってほしい ・とはいえ、たまたまになるようなこと取り入れなくては ・独居高齢者に限定しない、男女問わず、他市からもOK
活動内容	この日のプログラム、1000部発「今日は何の日?」、時事ネタ(今日の一言)⇒1000部歌⇒1014体操⇒1025休憩⇒1027伝書ゲーム、習字に文字を書いていける方式で、元気で小声で話すもの⇒1047クリスマス歌の歌い付け(参加者はハサミ排参:テールやいのセパチン)は参加者が行⇒1125終わったまで体操⇒後片づけ⇒1135茶話会(六花亭のトクパワーク)⇒1155今日やったことの話(おしゃべり)の時間と合わせて(20分程度) ・年3回食事会を開催、サロンのスタッフ(ボランティア)が手作り料理 ・誕生日の人にはプレゼントも	この日は10:30から11:30ゲーム(玉入れ、ボールリレー、輪投げ)⇒12:00食会(お雑煮、きんこ餅、納豆餅)⇒12:30サタ(食会)が子供にプレゼント⇒12:40終了 ・サロンの年2回(20日)に開催(月2回)を基本、最終でも1回(1月)はやる ・サロンの内容は毎回異なるが、様々なプログラムを入れる ・血圧測定、カラオケ体験は毎回実施 ・その他、音楽療法士によるリズムのとりなどの指導、映画会、健康教室(体操、健康相談など)、ゲーム、習字による講習、消防による講習(アーク、人工呼吸、AED、消防訓練など)、様々なプログラムを入れる ・小物づくりは最近大盛況になっているようで参加者が少ない⇒作った作品を11月の文化祭に出品 ・サロンのほか、ふれあい活動として、夏祭り、敬老会、日帰りバス旅行、文化祭、クリスマス会ももちろず(この日)を実施 ・年末にはお茶会を開催⇒男性も参加できる ・夏祭りはみその園(桑畑)の園にテントを3つ張って店を出す、伊達から仕入れた野菜を朝市として販売
運営を支えている人や組織	・費用:15~16万円/回⇒町内会助成10万、社協助成1.8万(=月1500円×12ヶ月) ・市の健康ポイントの対策、サロン1回1P、50Pで1000円の図書券⇒みんなが持ち寄り ・町内会から、費ったものがあれば返す、包括支援センター(館内)につなぐ ・サロン自分で作った旗物をもってくる人も	・町内会:回覧版で全戸にサロンのお知らせ ・社協:年2、3回サロンサポート連絡会を実施(講習など)、サロンだけでなくふれあい会食会なども含めて105,840円(平成27年)の補助、サロンの運営(約20,000円)の助成 ・連町でボランティア(サロン?)保険加入済み ・包括支援センター:健康教室、ゲームの提供
運営に影響を及ぼす個人・団体	・地区全体で1,200世帯、うち会員500世帯 ・65歳以上800くらい、30%弱 ・独居高齢者、高齢者増加が20%増 ・市内でも養老院に似た町内会⇒徒歩まで全部回ると時間がかかる ・参加者はこの日20人(うち男性12人) ・参加費無料 ・遠い人で100くらい、たいがいは歩いて来場 ・異世代交流の会は町内会役員とその子供たち(町内会行事のため)⇒参加者は、サロンスタッフ、サロン参加者(ほとんどが75歳以上の高齢者)、子供会役員、その保護者、町内会役員 ・子供たちの年齢:岩見沢市子供育成会に登録した小学1年生から中学3年生までの78人(小学生52人、中学生26人)	・町内会全体で232世帯、753人 ・75歳以上は185人、独居高齢者(ふれあい会食会の招待対象者) ・サロンの参加者は35~94歳、ほぼ女性、節度は固定化 ・年齢制限はない ・町内会(室蘭市)からサロンの1、2人来る(美園町:室蘭市に隣接した区域) ・保健会には他の町内会から入ってくる ・平成27年度は開催15回、約440人の参加⇒平成28年度は今のところ開催18回、約460人(参加者減少傾向がみられる) ・茶話会は19~15人(来ればいい)、食事会は40人(来ればいい) ・参加料、茶話会は無料、食事会は100円 ・この日のプログラムや食会もサロンの参加者、子供16人、高齢者10人、職員12人、スタッフ(福祉課長、民生委員女性)16人、…
似たような内容の活動	・老人クラブ⇒愛楽クラブに名称変更、5つの部活(バードゴルフ、麻雀、囲碁、カラオケ、ひらりスクール)	・近頃のコープとそばの店舗内で地域包括支援センターが「ちよこっことカフェ」として、健康相談などを実施(毎週水曜日10:30~12:00)、民生委員も手厚く10人くらいが参加しているよう(サロンの参加者も利用している)
運営体制	・スタッフは保健推進員(4人)をリーダーに、民生児童委員とボランティアがサポート(合計13人)、この日は7人 ・毎月のサロンの終了後にスタッフ会議を開催し、1年間の成果反省と次年度の計画を決定 ・町内会の定期総会で事業計画案、予算案を提案、承認を受けている ・ボランティアは保健推進員、ボランティアリーダー、保健推進員、ボランティア、民生児童委員(受付、事務関係(伊予情報発信、スタッフ会議))、取、ボランティア(茶話会、お食事会) ・平成27年度(平成28年3月)までは保健推進員が毎月のプログラムを決め、職員もすべて行っていた。 ・今年からは、当月の誕生日(日)以外の月のゲームの費用、体操、健康へのちょっとした参加⇒全体での運営に ・サロン前日の事務係に保健推進員が出席、そこで紹介されたゲーム(スキヤキゲーム)をさっそく「サロン」当日に取り入れている ・異世代交流については、サロンスタッフ、サロン参加者、子供会役員、その保護者、町内会役員(子供会育成部役員など)で実施⇒運営はすべてサロンスタッフ、子供会の副会長や指導員は子供会育成部役員 ・子供会への呼び掛けは子供会育成部副会長(開催案内)とプリントを子供会役員宅へ配布してもらう	・民生委員が町内会の役員に出席(他の町内会にはないはず)⇒民生委員がサロンに出るよう独居高齢者へ働きかけることができる ・スタッフは独居高齢者7人、女性の民生委員2人⇒大がかりなイベント(たとえばこの日のおしゃべり)の時には町内会の他部役員の協力ももらう ・サロンサポート一貫職員は14人中4人 ・町内会には他の町内会から、食事会などは人程度で参加⇒もっとも多しと思っているが、回覧版で呼びかけても反応がない ・福祉課長部長が企画、副部長が責任、メニュー ・サロン終了後には、おしゃべりや次回の具体的な内容を決めている ・サロンの内容は毎回異なるが、内容は、福祉課長部長はサロンの担当して4日目⇒おしゃべりか否かは不定でない ・食事を作るときは、みんな主婦していることなので、保健推進員に役割担っている
成果	・「今日は何の日?」参加者が調べてくる、すぐ手が上がる ・旗口を聞いたことがない ・サロン参加者同士で声かけ⇒老人クラブのバードゴルフに誘う ・サロンで話を聞かされている、気軽に話しかけやすくなった ・毎年月に保健センターから保健師が来て認知症のテストを実施⇒ほぼ現状維持、よくなったという人も ・異世代交流⇒子供たちに習字や折り紙の作業を体験、普段かいた遊び(百人一首、コマ回し、めんこ、おはじき、お手玉、あやとり、探偵、すごろく等)でサロンの参加者から教わる⇒自宅ではなかなかできない遊びを体験 ・異世代交流に参加すると種類が広がる、挨拶や声かけ、あるはお付き合いにも発展しているなど、ネットワークが自然に形成されている ・異世代交流に参加することで、高齢者は子供の顔がわかる⇒ラジカセ体操(町内会行事)で町内の子供と認識できる、登校時に子供へ声をかける(自然と「おはよう」といえる) ・認知症のお年寄りの女性が迷子⇒子供から「あそこのおばあちゃん」という指摘があり、無事解決 ・保護者(母親)が町内会女性の部活動に参加するケース⇒町内会の役員にサポート(OO)に伺っているという目星を付け、声をかける ⇒保護者の増加につながる ・サロンではないが、福祉(町内会行事)には子供も保護者も参加⇒町内会の役員にサポートする機会も増えている ・異世代交流で子供が参加しているから、どこかで、保護者が町内会役員などの顔を知ることができている ・異世代交流としていえば、年3回ジギスカンパニーを開催(異世代交流)、町内会全体で180~170人(来ない参加(子供会⇒町内会子供育成部)) ・子供夏祭り(町内会行事)には180人(来ない)の子供(町内会の子供が80人ほど)が来る、整理券を出すほど	・サロンの参加者が知り合いと集まれる ・民生委員が車で送り迎えをする ・参加者同士で仲良くなることはけっこうあるようだが ・挨拶も増える ・日帰り温泉にも行く機会も増える ・この日参加者に話をあててもらったり、来た子供の世話(面倒を看たり)、コートを着せたり)をしてもらったり、台所の手伝いをしてもらっている(参加者) ・異世代とのつながりはない、町内会の手伝いもしないが、おしゃべりや次回の具体的な内容を決めている ・子供と高齢者の交流として、夏休みの最初の1、2週間ラジカセ体操をやっている⇒子供と高齢者が顔見知りになり、下の名前まで子供を呼ぶようになっている ・また、月2回(第13次)で、下校時という取り組みがあり、若年小学校の1、2年生を下校時に学校まで迎えに行き、自宅まで送迎するという取り組みがある(近隣の4町内会参加、各町内会からくる人(来ない)参加、町内会加入していない子供も送り届け)⇒「おはよう」「こんにちは」と挨拶してくれる ・避難訓練を実施⇒防災知識(避難所など)の普及に役立っている
継続できた理由	同じことをやると飽きられる⇒毎回違うことをやっている⇒継続のポイント⇒いかに楽しませるか	・サロンが定例化している ・楽しみにしている人がたくさんいる ・スタッフは減少しているが、町内会の役員の結びつきがしっかりしており、お互いカバーしあっている
問題点・課題	・出てこない人をどう呼び張り出すか ・役員のみでやりたくない ・保護者や子供の教育に役立つ、町内会活動に出てこない ・役員に任せすぎ ・家に閉じこもりの高齢者の参加、より多くの男性の参加が将来的な課題 ・アパート居住者(若い世代)はほとんど町内会役員ではない	・若い世代をどう見つけるかが課題、文化祭では子供の作品を小学校から借りて展示している⇒親が子供の作品を見に来る⇒個人的に声をかけてみる(この日もちろずに来た)⇒同じようにアプローチ ・サロンを明るくする(プログラム)改善、町内会は30周年その記念行事として子供会を復活させたところ、30人(来ない)の子供が来た、異世代交流のついでもある ・参加者をいかに増やすかが課題、独居高齢者の中にはまだつけない人も、若い人たちを呼び張りだしてどう呼び掛けるか ・個別に個別の手伝いをしていく(伊予情報)町内会もあるようだが、スタッフの負担が大変、いっていい ・男性の参加者が少ない ・小さな町内会ではサロンのスタッフが少ない⇒やめてしまうケースも、登別市町内会6町内会のうちサロンのやっているのが約50町内会 ・運営でできたサロンのサークル活動もサロンの開催回数にカウントしている⇒厳密に言えば別のものだし、サークル活動にサロンのスタッフが関わっていないこともある問題は ・社協からの助成金は最大5万円(81,000×50回)⇒実施サロンだけで50回はできない
今後の方向性	・地域認知症予防教室として立ち上げたサロンへの目的にそって継続していくことが大切 ・手を替え、品を替え、飽きさせない、楽しい満載のサロンに、サロンスタッフ一同が関わらなければいけない ・今後、参加者も企画運営に関わっていくようにしたい	・町内会館を活用して年代を超えた交流を作りたい(市は町内会館を解体して集約を図ろうとしている) ・これらは認知症や統合失調症(近隣に支援センターがある)に対する理解を深めていく必要がある

出所：インタビュー調査結果および提供資料等に基づき筆者作成。





表 1-8 分析対象事例の概要 (8)

若見沢市・緑が丘地区町会連絡協議会		上ノ国町・厩石町内会
設立までの経緯	<ul style="list-style-type: none"> <li>5町会の女性部で集まって何かできないかということ⇒月1回集まって体験をはじめるとだんだん集まる人数が増えてきたが、その後伸び悩む⇒男性を巻き込む必要がある</li> <li>社協から助成制度がある旨の承認があり、食事をはじめてみようということ⇒平成3年9月、あったかフレンズ食事会としてスタート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>隣接する部落(汐吹、木ノ子)も似たような規模(100戸弱、200人弱)</li> <li>町の方から中央区内会でサロンをやっているが、厩石でもどうかという働きかけがあり、話を聞いた中ではいいと思って、平成27年にはじめた⇒今年度は2年目になる</li> </ul>
果たすべき役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>5町会の住民間のつながり、居場所づくり、引きこもり防止⇒集まる場所</li> <li>民生委員も食事会の役員に⇒安否確認の場としても機能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>引きこもりの防止、外出機会</li> </ul>
運営方針	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加対象者(70歳以上で独居の方を招待)よりもスタッフの方が多いという声もあるが、人のつながりということで考えれば何ら問題はない</li> <li>当初は毎月実施⇒大雪で延期になったり、来れない人が増えたり⇒今年度から1、2月をやめて年10回体制に</li> <li>5町会が輪番制で運営を受け持つ(年10回⇒各町会2回)</li> <li>健康づくり、歌、芸能などのプログラムを食事会とは別に実施</li> <li>食事会のメニュー・プログラム(アトラクション)の内容は、当番の町会にお任せ</li> <li>参加者の交流を主にした内容に</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>金をかけずにやってみようというのが町の方針⇒道具は手作り</li> <li>第2案と決めて基本的には予算をいらない(節減をやる)ことがある⇒重視した場合はサロンはお休みに</li> </ul>
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成27年までは近隣のグループホームの入居者を年10回招待(7月)していた⇒人数が増え、負担になってきたことから、平成28年より受け入れ中止</li> <li>参加者は1030名⇒食事会までの間、輪投げや体験などのレクリエーションを実施(健康づくりの一環)</li> <li>夏場(5～10月)は、食事会の前に、近隣の公園があるため散歩も</li> <li>保健師に来てもらって健康診断、健康相談、体操指導等も実施</li> <li>この日は11時⇒食事会⇒11時⇒喫茶室(1～9月の誕生日の人をお祝い)⇒12時～アトラクション(豆まき、市部部長がなまはけで登場)⇒12:15終了</li> <li>食事会のほか、遠足、ゲーム(ふまねつと、ミニボーリング)、百人一首などを実施(いきいきサロンとして)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>講話など(後述)のほかは、ゲーム(室内バークゴルフなど)⇒適度におしゃべりなども入れて、びっぴりではなくなりやすくなる</li> <li>料理教室をサロンとしてやったこともあった⇒食材など費用がかかるので、なかなかできない</li> </ul>
運営を支えている人・組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加対象者(5町会34人)は無料、その他(町会役員、スタッフ)は参加費として300円/人⇒社会の助成金と参加費でまかなっている、町会会計からの持ち出しはなし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>駐在所に依頼して交通安全の話やオレオレ詐欺防止の寸劇をやってもらう(年1回程度)</li> <li>町に依頼して保健師に来てもらい、体操指導や講話をしてもらう</li> <li>町からの助成金は初年度(平成27年度)2万⇒2年目(平成28年度)は1.5万⇒町会代打りでできなくなってきたら町からの助成で対応する経路は経路から出してもらっている</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>5町会合計で世帯数900戸、人口3,000人弱、高齢化率30%超(市内全体で26～27%)、南北2km、東西1km</li> <li>参加対象者のうち男性は4～5人くらい来てくれる</li> <li>参加者の平均年齢は80歳近い</li> <li>参加者から何か要望があるかどうかはわからない⇒あったとしても各町会のレベルでまわっている</li> <li>希望で来る人が多くない⇒20名あるが、ふだんから歩いてるので、あまり苦にならないようだ</li> <li>その他、車に乗らせて来るケースも、路線バスもあるが利用していないようだ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>厩石町内会のエリアは76戸、180人強</li> <li>厩石町内会では70歳以上が63人(全体の3分の1くらい)、うち独居が12人</li> <li>いつも来る、来ないし、来るとこない(この日は11人(会長含む)、男性の参加者は2人(会長と老人会会長))</li> <li>参加者の顔ぶれはほぼ同じ</li> <li>平均年齢は75歳以上</li> <li>厩石町内会の役員のみ(隣接する町内会(汐吹)にはサロンがないが…)</li> <li>参加費無料⇒とるものであればなるべくないという意見と、作るものにもよるが経費がかかる場合は100円でも200円でも参加費をとっているという意見</li> <li>民生委員の独居高齢者宅への訪問も併行し、サロンに誘ってあるが、なかなか来なくていい</li> </ul>
	似たような内容の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>市内には28町会、町会連絡協議会のようなブロックが28ヶ所あるが、このような食事会をやっているのは緑が丘を含め3ヶ所(あとは上ノ国町、栗沢)</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>5町会が輪番制でやっていること(年2回ならそれと負担にはならない)</li> <li>食事会の後片付けのあと、次回の当番の町会が何をするか、買い出しは誰がやるか…等の打ち合わせをしていることが多い</li> <li>次年度の事業計画(年間の原簿、開催日は11月の役員会で協議、3月の新旧役員交流会で決定⇒最終的には4月の町会連絡協議会で決定)</li> <li>民生委員は積極的に参加者へ話しかけたり、一緒にゲームをしたして⇒安否確認、情報収集の一環なのか</li> <li>1区江にはないが(区単位)向け委員(町会連行の固定化)は是非、誕生日の人の紹介を食事会の前に(挨拶が長くなりお祝い物があふれる)⇒新旧役員交流会、役員会(11月)にて協議</li> <li>食事会参加者は34人(町会長、女性部、保健推進員、民生委員、児童委員など)、うち事務局として4人(ふれあい推進部長、副部長2人、会計)</li> <li>食事会メニュー・プログラム(アトラクション)は当番の町会にお任せ</li> <li>以前、競争意識(よその町会よりもいいものをつくる)から、お金をかけてやる(謝金を払ったり)町会が出てきた⇒今年度から、お金をかけず、自分たちの手でやるという方向に(ボランティアであってもよそから呼ばない)</li> <li>お互い、前線体制でつながる</li> <li>互恵し、雰囲気で行っているわけではないと思う</li> <li>お世話を、されるという役割が強いというわけではない⇒後片付けはみんなでもやるし、2杯目のお茶は各自が入れる</li> <li>各町会の女性部長が個々の町会の参加者を担当し、当番の町会の女性部長へ連絡</li> <li>毎回の内容等についてノートをつけている⇒これを参考に次回の内容を決めることが多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>年間おこなう計画は立てているが、毎回参加者から意見を聞いて、翌月何をするか最終的に決定⇒計画と違う内容になることもある</li> <li>会場の準備は会長、それほどの負担ではない⇒料理教室(前送)のように人手が必要なものと老人会に頼むしかない</li> <li>飲み物はあらかじめ誰かが買って、費用は都部員に請求</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶できる人が多くなった</li> <li>町会輪番制でやっているも限界がある(つきあい、交流の範囲)⇒5町会で行っているから、広い範囲で人のつながりができる</li> <li>食事会に参加した人間までつながっている(他の行事と一緒に参加するなど)</li> <li>食事会にも近所でお互いに話し合ってくる</li> <li>どの人のことも誰かに聞けば情報(状況)がわかる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>初回は小学生が2、3人来た⇒一緒にゲームなどをしたが、高齢者だけで話してしまいがち、その期待されたため、飽きてしまったよう</li> <li>その後小学生の足が遠のいた</li> <li>土日はクラブ活動が入ることあり、まづなくなった面もあるのでは</li> <li>もつちは12月中旬に学校でやっている</li> <li>百人一首も町内会で行っているが、果たして子供が興味を示してくれかどうか</li> <li>お茶も作る人、お茶を人はいらぬようだが…</li> <li>町内会なので話しかけず⇒サロンで来てくれる人というわけではない</li> <li>欠席する人は事前知らせてくれる場合が多いが、欠席の理由がわからず、みんなが心配し、家に行ってみたら寝かかっていた(どっかへ出て行ってた)ということがあった</li> </ul>
継続できた理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>町会連絡協議会が主体となった取り組み(もちろん各町会での取り組みもあるが)⇒町会横断的に取り組んでいる、市内唯一ではない</li> <li>5町会が輪番制でやっていること(前送)</li> <li>いっぺん(女子力)(女性部の方)⇒お世話をし、お茶を淹らす(謝金を払ったり)町会が出てきた⇒今年度から、お金をかけず、自分たちの手でやるという方向に(ボランティアであってもよそから呼ばない)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>まだ2年なので…</li> </ul>
問題点・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>食事会の準備はスタート以来ずっと300円/人で行ってきた⇒そろそろ厳しい(買を落とすにも限界)⇒もう少し準備をあげる(参加料の上げ下げ)ことも検討したい</li> <li>次世代につなげていけるか⇒次世代である団塊の世代は個人主義的な要素が強い⇒なかなかつなげることが難しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いっぺんサロンに参加してみると楽しさがわかり、続けて来るようになるが、いっぺん参加してもう一回のハードルがかなり高い</li> <li>もう少し予算を出してもらえないか(1.5万なら飲み物代で済ませ、何もできない)</li> <li>9時、10時から話して、翌朝には参加者が増える⇒これも問題なのではないか⇒食事会をみんなで一緒にして、その後ゲームであったり、思い思いに過ごすことができれば、参加者も増えるのではない</li> </ul>
今後の方向性	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加者から「ずっと続けたい」という希望が強い⇒なんとか続けたい</li> <li>20年以上以上した歴史がある⇒これを背景にして続けていけるかどうか</li> <li>内容の見直し、改善が必要(年10回⇒10回、アトラクションにお金をかけない)⇒当番の町会に負担のかからないようにしていくことが重要</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>原品でもあれば行くという気になると思う</li> <li>お祭りの時に使わらじを毎年10足も買っている⇒わらじを作れる人に教わりながら、わらじ作りを高齢者と小学生でやれば、わらじは買わなくてすむし、いいのではない</li> <li>平均年齢が高いであれば、甲の数を減らした方がいい、それと負担はない⇒あとは、各人が持ち寄ればなんとかなるのではない⇒毎月ならいいかな、持ち寄りがない人は補助的負担⇒若い、若いならいいのではない</li> <li>婦人会でひな祭りや餅つき料理教室をやったどうかという提案をしたが、重荷だったようで実現しなかった</li> <li>今後参加者が減ったとしても、なんとか継続していきたい</li> </ul>

出所：インタビュー調査結果および提供資料等に基づき筆者作成。



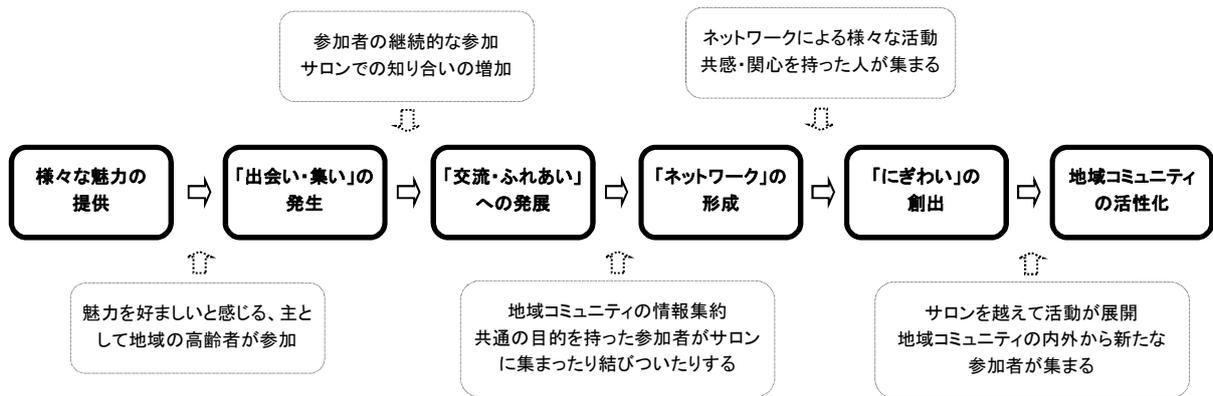


図 1 本稿における分析枠組

出所：菅原（2013b），p. 42、および菅原（2015），p. 128 を一部改変。

④そうして、ふれあいサロンの参加者同士のつながり、すなわち「ネットワーク」が形成されるようになる。ふれあいサロンにおいて、参加者間のネットワークによる様々な活動が行われる（「ローカル・サポート」（入川（2012），p.31）、「自分らしい活動」（坂倉・保井・白坂・前野（2013），p.29）ようになると、それらの活動に対して共感したり、関心を持ったりした人が、ふれあいサロンに参加するようになる。

⑤その結果、新たな参加者がふれあいサロンに集まってきて、「にぎわい」が創出されていく。ネットワークによる活動がふれあいサロンだけでなく、ふれあいサロンを越えて様々な場所で展開されていくようになると、地域コミュニティの内・外から、さらに新たな参加者がふれあいサロンに集まってくる（「地域での『人と交流できる場の提供』には『広域性』『多様性』が求められる」（小松（2005），p.101））。

⑥こうした一連のプロセスの結果として、地域コミュニティの活性化がもたらされるのである。

### Ⅲ. 事例分析

前述した分析枠組に基づき、18ヶ所のふれあいサロンにおいて、地域コミュニティの活性化がどの程度図られているのかについて分析した結果は、表 2-1～2 の通りである。

その結果、多くのふれあいサロンにおいて、「ネットワーク」の形成がみられていることが明らかとなった。しかし、ほとんどのふれあいサロンにおいては、「にぎわい」の創出までには至っておらず、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化をもたらしているとは言いえないことも明らかとなった。

表2-1 分析対象事例における地域コミュニティの活性化(1)

分析枠組	柏木町町内会	港町会	登別本町町会	花川南郷町内会	島松亭町内会	新生町町内会	桜ヶ丘町内会	やまど町内会
魅力の提供	サロンの(年8回)「ふまねっど」(10回) サロンの他に、さらに「ふまねっど」がある	月2回(他のサロンとあわせると週1回) 月2回は別に、さらに「ふまねっど」も実施されている 「次は何の予定か」と楽しみにしている	週5回、小学生の日常的な交流 月2回(ふまねっど、町会交流)も実施されている 月2回(ふまねっど、町会交流)も実施されている 月2回(ふまねっど、町会交流)も実施されている	月2回(ふまねっど、町会交流)も実施されている 月2回(ふまねっど、町会交流)も実施されている 月2回(ふまねっど、町会交流)も実施されている	週1回 毎週木曜開催、祝日でも開催	年13回、町会交流(花火) 家族が楽しめる雰囲気 山頂があるのでもちろん楽しみ	年11回(12月は休み) 行ける場所がある みんな一緒に参加できる	月1回、町会交流 町会交流で、自宅ではなかなかできない遊びが体験できる 地域型認知症予防が目的
「出会い風」の発生	みんなでお茶を飲むと楽しい サロンの中で仲良しができる	1人暮らしだと話をする機会がないので楽しみ みんなの元気な顔を見て安心 ここではじめて話したというケースが少なからずある	前の知り合いが通学路→小学生も出入り自由 近くの公園で遊んだ後、子供たちが互ちあそぶ サロンのため話をするようになった人がいる	サロンのうち1回はおしゃべりも、月2回も多くなるおしゃべりイベントに参加するようになり、だいたいの人とは顔見知り	サロンの仲間が来る サロンの仲間が来る サロンの仲間が来る	同じ町内でも顔見知りがない人がいるので、名刺を作ってほしいという要望が参加者からある	住居の人はみんなどか食べることがいい いい、人と話をすることがいい スタンプ前主もサロンで話して知った 向かいに住んでいるのに(それまで)話したことがなかった 参加者は昔から知り合いの人が多いが、農産部から移住してきた人はサロンで仲良しを作っているように	町会交流を通じて参加者は子供の顔がわかる
「交流・ふれあい」への発展	参加者がまちなかでも声をかけられる スタッフから声をかけやすくなる	夏休み・冬休みにサロンでやる子ども達の先生役の参加者に子供たちが挨拶してくれる	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に
「ネットワーク」の形成	参加者がまちなかでも声をかけられる スタッフから声をかけやすくなる	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に
「にぎわい」の発生	参加者がまちなかでも声をかけられる スタッフから声をかけやすくなる	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に
地域コミュニティの活性化	参加者がまちなかでも声をかけられる スタッフから声をかけやすくなる	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に	近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に 近郊報告や病院のことなど情報交換できる 入浴して(サロンに)不参加の人の様子も話題に

出所：インタビュー調査結果および提供資料等に基づき筆者作成。

表 2-2 分析対象事例における地域コミュニティの活性化 (2)

分析枠組	美園町内会	タウン24町内会	白樺町内会	洞爺湖温泉 8区自治会	啓北連合町内会	緑が丘地区 町会連修協議会	鷹宮町内会	南町第2自治会	金山連自治会
魅力の提供	月2回を基本(年20回メ リ)。異世代交流(もちつき )	異世代交流(夏休み・冬休 み)	年11回(1月休み)	月1回	月2回	年10回(1-2月は休み)	月1回 以前は異世代交流が少 ない	異世代交流 サロンは年6回	異世代交流 サロンは年4回
	年齢制限・地域制限なし	高齢者と子供のコミュニ ケーションの場	地域に馴染みのサークル・集 いはたくさんある。ここで はお茶を飲んでゆっくりし てもらおう	第2土曜(平日は忙しい、 日曜は家族と過ごすだろ う)	参加者に押し付けられない ようなプログラムを用意し てお茶、やわらかいかわゆる ように	25年間継続中 5町会(の輪番制) 当番町会 に内容はお任せ	第2土曜 参加者の意見を聞いて内 容を決める	必ず座談会をとる。懇談をは かる 参加者からアンケート→多 様なプログラムを実施	ほとんどから近所での交流 がある
	「出会い・集い」の発生								
	参加者の継続的な参 加	子供と高齢者が顔見知り になる		のぞみ同士の居住者のみ や、子どもからお近所を歩 かせておき、サロンで仲良 くなるという事はない	近くに住んでいる人同士何 人かで誘い合ってサロンに 来ているようだ	近所でお互いに誘い合っ て来る	同じ町内なので顔なじみ サロンで会って仲良くなる という事はない	サロンで仲良くなるケース は結構あるのでは りターナーが回覧板を見て 来た	ほとんどの良い自治会 サロンで仲良くなるという ことはない
	「交流・ふれあひ」の発展	参加者同士が仲良くなるこ とはあるようだ	お互い声をかけあう、誘い 合って参加する	参加者同士誘い合う(サ ロン行こうね)	サロンで知り合いができる (①) サロンで知り合いができる 印象	挨拶できる人が多くなった は情報(状況)がわかる	初回は小学生が2、3人來 たが、顔覚えてしまったの か、クラブ活動で代しの か、来なくなった	外で参加者と会ったとき に、すでに顔見知りなので 話ができる	子供のいる世帯は1、2世 帯→参加者が孫を連れて 参加することもあるが、家 族単位で回まっています
	地域コミュニティの情 報集約	参加者にも手伝いをしよ う(子供の面倒、 お所の手伝い、餅をあげる など)	中学生になっても覚えてく れていて、挨拶してくれ る。子供を通して親世代とコ ミュニケーションがなれてい るのではないか	サロンでないと聞けない話 がある(参加者の体験談や 保健師の話)	みんながスタッフ、お客さ まはない 参加者が自主的に合唱を リード	どの人のことも誰かに聞け る	欠席する場合は各自ら んと事前に知らせてくれ る		
	共通の目的を持った参 加者がサロンに集まっ たり結びついたりする	スタッフ(高齢者)はやって いて楽しいし苦痛ではない 子供が楽しみに待っていて くれる。やわやわやうという 気持ちに	中学生になっても覚えてく れていて、挨拶してくれ る。子供を通して親世代とコ ミュニケーションがなれてい るのではないか			後付けはみんな(参加 者、スタッフ)でやる		参加した人がまた参加して いない人に「楽しいよ」と動 機を話してくれる	社務主任のお茶会に 行っている参加者が他の 参加者を誘っていくという ケースはある
	「ネットワーク」の形成	日帰り温泉にもお互い誘い 合って参加する				サロンに来た人同士でつな がっている(他の行事に一 緒に参加するなど)			
	ネットワークによる様々 な活動								
	共感・関心を持った人 が集まる								
	「にぎわい」の創出								
	サロンを越えて活動が 展開								
	地域コミュニティの内 外から新たな参加者が 集まる								
	地域コミュニティの活性化								

出所：インタビュー調査結果および提供資料等に基づき筆者作成。

## IV. 考察

前述の分析結果に基づき、今後、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていく上で必要なこととして、以下の 8 点があげられる。

### 1. 一定程度の参加者数の確保

一般に、世帯数が比較的小さい町内会・自治会においては、すでにふれあいサロンの参加者同士が顔見知りであり、参加者間である程度のつながりがみられている（例えば、洞爺湖温泉 8 区自治会、扇石町内会、金山通自治会）。

そうしたふれあいサロンでは、すでに存在しているつながりをどのように維持していくかが目的となっており、なかなか新たな出会い・集いや交流・ふれあいを作るといふことにはならないのが現状である<sup>6</sup>。

したがって、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、新たな出会い・集いや交流・ふれあいが可能となるような、一定程度の参加者数の確保が求められる。

### 2. ボランティア・スタッフの参画

限られた人数の町内会・自治会の役員が主体となった運営体制（スタッフ構成）では、どうしても毎回の運営で精一杯となり、そのため、ふれあいサロンでの交流・ふれあいが参加者間の直接的なものに限られてしまい、なかなか参加者とスタッフの間の交流・ふれあいには発展しないのが現状である。

そこで、民生委員や児童委員、あるいは地域住民がボランティア・スタッフとして参画することにより、運営体制にゆとりが生まれ、参加者とスタッフの間の交流や、スタッフを介した参加者同士の交流が可能となる。その結果、交流・ふれあいの幅が広くなり、ネットワークが形成されやすくなる（例えば、①民生委員や児童委員、保健推進員がボランティアとして、スタッフの中心となっているのは、花川南第 3 町内会、やまと町内会、②地域住民によるボランティアがスタッフの中心となっているのは、島松寿町町内会、駒園地区町会連絡協議会、桜ヶ丘町内会）<sup>7</sup>。

したがって、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、様々な形態の交流・ふれあいを可能とすべく、なるべく多くのボランティア・スタッフに参画してもらうことが求められる。

### 3. 様々な団体との積極的な連携

ふれあいサロンにおける最大の魅力の 1 つであるプログラムの充実を図るには、町内会・自治会だけで対応するのは限界があり、外部の他の団体との連携が必要である。しか

<sup>6</sup> もちろん、すでに存在している参加者（地域住民）間のつながりを維持していくことは大変重要であり、ここで、そのことを否定しているわけではない。

<sup>7</sup> この他、例えば、輪西サロンぷらっと（室蘭市）は、民生委員児童委員協議会が中心となって、福祉協議会、連合町会、NPO 法人が連携しながら、運営が行われているサロンである。

し、そのための連携先としては、多いところでも、社会福祉協議会、行政、警察、地域包括支援センターに限られているのが現状である。また、プログラムの選択に際しては、スタッフの個人的なネットワークに依存せざるを得ないふれあいサロンもある。しかし、それでは、プログラムの充実を図ることが容易ではなく、ふれあいサロンの魅力づくりにはなかなかつながらない。その結果、参加者の足が遠のいてしまい、それまでの出会い・集い、交流・ふれあいが失われてしまう危険性がある。

そこで、前述の連携先に限らず、様々な団体との積極的な連携を図っていくことによって、ふれあいサロンの参加者数の増加が見込まれ、交流・ふれあいの幅が広がることにもつながる（例えば、①柏木町町内会では、葬儀社、高齢者施設等との連携、②南町第2自治会では、営林署、ヤクルト、遠軽信金等との連携が、それぞれ推進されている）。

したがって、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、様々な団体と積極的に連携し、プログラムを充実させていくことが求められる。

#### 4. 昼食の提供

ふれあいサロンの主たる参加者である独居高齢者（スタッフ側から見ると、最も参加してほしい人たち）には「みんなで食べると楽しい、おいしい」という意見が多い。もちろん、食材の準備等で費用がかかる分を、そのまま参加料に上乗せして参加者に転嫁することは難しいのに加え、食事の準備をするスタッフの負担が大きいという問題がある。

しかし、1人で食事をとるよりも、みんなで一緒に食事をとることで、会話がはずみ、コミュニケーションが図られ、それが交流・ふれあいやネットワークの形成へと進展していくことが期待される（例えば、①港町会では、毎回の弁当（昼食）が参加者にとって楽しみになっており、②緑が丘地区町会連絡協議会では、当日の当番の町会に昼食のメニューが任されている（何が提供されるかわからないという意味で楽しみは必ずである））。

したがって、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、昼食の提供（必ずしも毎回提供されなくてもよいし、手作りでなくてもよい）が求められる。

#### 5. 近隣の町内会・自治会からの参加者の受け入れ

多くのふれあいサロンは、町内会・自治会からの様々な支援（経費の助成、町内会館の無償提供等）を受けている。そのため、参加者については、当該町内会・自治会の会員に限定しているケースが多い。

しかし、近隣の町内会・自治会からも参加者を受け入れることによって、参加者同士の新たな出会い・集い、交流・ふれあいのみならず、複合的なネットワークの形成へと発展し、その結果、にぎわいの創出につながる可能性がある（例えば、他の町内会・自治会からの参加もOKとしているのは、登別本町2町会、花川南第3町内会、美園南町内会）。

さらに、近隣の町内会・自治会でふれあいサロンが行われているのであれば、当該ふれあいサロンとの間の交流につながる可能性もある。その結果、相手のプログラムを自分のところでも取り入れてみる、スタッフ間の相互交流によってスタッフの負担軽減にもつな

がる、といったことが可能となる<sup>8</sup>。

したがって、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、可能な限り、近隣の町内会・自治会から参加者を受け入れていくことが求められる。

## 6. 多様なプログラムの展開

ふれあいサロンのプログラム構成を見ると、おおむね、多様なプログラムを隙間なく展開しているところと、おしゃべりが中心で特にプログラムを展開していないところの2つに分けられる。参加者同士がすでに知り合いになっているのであれば、おしゃべりが中心でも問題はないだろうが、あまり人間関係が深くない場合については、おしゃべりだけでは、なかなか交流・ふれあいに進展していかないであろう。

そこで、前述の3.とも関連するが、ある程度多様なプログラムを用意し、展開していくことにより、参加者同士の出会い・集い、交流・ふれあいにつながるとともに、ネットワーク形成のきっかけが生まれる可能性がある（例えば、①新生町望洋町内会では、おしゃべり 25 分、ゲーム 45 分、講話 25 分、カラオケ 15 分、②島松寿町町内会では、おしゃべり 35 分、体操 35 分、軽食・コーヒー 20 分、合唱 30 分、③白樺町内会では、おしゃべり・軽食 49 分、講話 21 分、参加者の話題提供 33 分、その他 13 分、というように、ある程度バランスの取れた、多様なプログラムが展開されている）。

したがって、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、おしゃべりの時間をある程度確保しつつも、多様なプログラムを展開することが求められる。

## 7. 参加者の運営への参画

ふれあいサロンの参加者とスタッフの間で、参加者が「してもらおう」、スタッフが「してあげる」という役割がはっきりしてしまうと、参加者にとっては、顧客でないにもかかわらず「してくれない」という不満がスタッフに対して生まれやすくなる一方、スタッフにとっては、ボランティアであるにもかかわらず「しなければならない」という義務感・負担感が生まれやすくなる。その結果、ふれあいサロンの運営が円滑に行われなくなる危険性が出てくる<sup>9</sup>。

そこで、ふれあいサロンの参加者にも、「してあげる」役割を担ってもらうことによって、参加者における「参加意識」や「自分たちのサロン」という意識の醸成が期待できる（例えば、①やまと町内会では、当月誕生日の参加者が翌月のゲームを考えることになっている、②啓北連合町内会では、歌の得意な参加者が、合唱の時間には自主的にリード役を担っている、③その他、多くのふれあいサロンでは、後片付けをスタッフと参加者が一緒に行っている）。その結果、参加者とスタッフ間の交流・ふれあいが深まり、ネットワークの形成へとつながる可能性がある。

<sup>8</sup> これに関連して、菅原（2017）は、「ふれあいサロン間のネットワーク化は、ふれあいサロンがそれぞれ抱えている問題点・課題の解決に資するであろう」（p.12）と指摘している。

<sup>9</sup> 前述の「うちの実家」では、「スタッフは部屋でエプロンをしない」、「2 杯目からは来た人が自分でお茶を入れる」（以上、菅原（2013b），p.44）というルールが存在していた。分析対象事例の中にも、お茶については「お茶出しは参加者にやってもらおう」（港町会）、「お茶についてはポットに入れておき、ポットを出して各自自分で入れてもらう」（島松寿町町内会）、「2 杯目のお茶は各自が入れる」（緑が丘地区町会連絡協議会）というルールが存在している（表 1-1、1-3、1-8 参照）。

したがって、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、参加者に何らかの形でふれあいサロンの運営に参画してもらうことが求められる。

## 8. より大きな枠組での運営の模索

朝日新聞によるアンケート調査（2015年9月17日～10月1日）によれば、町内会・自治会の課題として最も多くあげられたのが「会員の高齢化、役員のなり手不足」（45.3%）、次いで「活動内容がわかりにくい、負担が大きい」（19.2%）となっている<sup>10</sup>。さらに、分析対象事例において、「（町内会・自治会の）会員減少に伴う予算の減少」（新生町望洋町内会）、「もう少し予算を出してもらえないか（飲み物代でおしまい、何もできない）」（扇石町内会）、「財政状況は厳しい」「もう少し財源があれば、サロンはもっと増えるのではないか」（以上、南町第2自治会）のように、財源の不足を問題点・課題とする意見がみられている。これらをふまえると、今後も単独の町内会・自治会でふれあいサロンを継続して運営するのは容易ではないと言わざるを得ない。

そこで、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていくためには、より大きな枠組での運営を模索していくことも求められる。より大きな枠組でふれあいサロンを運営することによって、ふれあいサロンの対象となる地域の範囲が拡大する結果、①一定程度の参加者数の確保や、近隣の町内会・自治会からの参加者の受け入れが容易となることに加え、それに伴って、運営に参画してくれる参加者の増加も見込まれる、②ボランティア・スタッフの参画が容易になるとともに、昼食を提供するのに必要なスタッフの確保も可能となる、③②でのスタッフの増加に伴って、その人的ネットワークが拡大されることに加え、連携しうる団体が増加し、様々な団体との連携が可能となり、その結果、多様なプログラムの展開が可能となる。

つまり、より大きな枠組でふれあいサロンを運営することによって、前述の1～7の実現が可能になるといえよう。

より大きな枠組の例としては、分析対象事例の中の「町会連絡協議会」（駒園地区町会連絡協議会、緑が丘地区町会連絡協議会）や「連合町内会」（啓北連合町内会）、関係団体の連合体（タウン24町内会の異世代交流：西帯広連合町内会福祉部・婦人部、寿会（タウン24町内会の老人クラブ）、つつじヶ丘小学校生涯学習推進協議会、つつじヶ丘福祉センター運営委員会の5者による運営）があげられるが、その他にも、地域コミュニティ協議会（「小学校区または中学校区を基本とし、自治会・町内会を中心にさまざまな団体等で構成された組織」であり、「PTA、青少年育成協議会、老人クラブ、婦人会、NPO、民生・児童委員など、地域のさまざまな団体などで構成」されている）<sup>11</sup>や、サロンを運営しているNPO法人やボランティア組織との連携等<sup>12</sup>があげられる。

<sup>10</sup> 朝日新聞デジタル（<http://www.asahi.com/opinion/forum/012>）（2017年3月27日アクセス）。また、この点については、紙屋（2017）、pp.44-57にも詳しい。

<sup>11</sup> 新潟市ホームページ（<http://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/shimin/community/comkyou.html>）（2017年3月27日アクセス）。

<sup>12</sup> 中田（2012）は、「NPO等の組織と町内会、コミュニティ組織との連携は、今後に期待される地域活動の方向です」（p.104）と指摘している。

## V. おわりに

### 1. まとめ

本稿では、主として町内会・自治会が運営するふれあいサロンが、①どのようにして地域コミュニティの活性化を図っているのか、②今後、どのようにして地域コミュニティの活性化を図っていくべきか、の2点について、具体的に明らかにすることを目的とした。

まず、2014～2015年度に道町連から助成を受けているふれあいサロンのうち、地域コミュニティの活性化に寄与していると考えられるものについて、①世代間交流が行われているふれあいサロン、②おおむね月1回以上開催されているふれあいサロン、の2つの基準を用いて抽出し、次に、当該ふれあいサロンを運営しているメンバー（町内会・自治会の役員、ボランティア・スタッフ等）に対するインタビュー調査を行うとともに、当該ふれあいサロンに関する資料等の収集・整理・分析を行った。その結果、最終的に18ヶ所のふれあいサロンを分析対象事例として取り上げることとした。

これら18ヶ所のふれあいサロンにおける、①設立までの経緯、②果たすべき役割（目的、ねらい）、③運営方針、④活動内容、⑤運営に影響を及ぼす団体・個人、⑥運営体制、⑦成果、⑧継続できた理由、⑨問題点・課題、⑩今後の方向性、の内容をふまえ、分析枠組に基づき、18ヶ所のふれあいサロンにおいて、地域コミュニティの活性化がどの程度図られているのかについて分析した。

その結果、多くのふれあいサロンにおいて、「ネットワーク」の形成がみられていることが明らかとなった。しかし、ほとんどのふれあいサロンにおいては、「にぎわい」の創出までには至っておらず、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化をもたらしているとははいえないことも明らかとなった。

この分析結果に基づき、今後、ふれあいサロンが地域コミュニティの活性化を図っていく上で必要なこととして、(1)一定程度の参加者数の確保、(2)ボランティア・スタッフの参画、(3)様々な団体との積極的な連携、(4)昼食の提供、(5)近隣の町内会・自治会からの参加者の受け入れ、(6)多様なプログラムの展開、(7)参加者の運営への参画、(8)より大きな枠組での運営の模索、の8点があげられることも明らかとなった。

### 2. 今後の研究課題

今後、ふれあいサロンによる地域コミュニティの活性化に関する分析をより深めていくためには、まず、北海道外のふれあいサロンや地域の茶の間において同様の分析を行うとともに、北海道内のふれあいサロンを対象とするアンケート調査を実施することにより、本稿での結論が妥当であるか否かを検証する必要がある。

また、もし、単独の町内会・自治会によるふれあいサロンの運営の継続を図っていくとすれば、その脆弱な経営基盤（とりわけ、ヒト、カネ、情報）を強化することが必要である。そのために、町内会・自治会は適切なマネジメントを展開する必要がある。そこで、町内会・自治会はどのようなマネジメントを展開すべきか、について具体的に検討していく必要がある。

さらに、町内会・自治会が適切なマネジメントを展開するためには、町内会・自治会の

役員同士がまとまっていくことはもちろん、会員（地域住民）を取り込んでいくことが求められる。そのためには、役員同士、および役員と会員（地域住民）との間に、信頼関係や連携・協力関係が構築されなければならない。つまり、役員同士、および役員と会員（地域住民）との間に、どのようにしてソーシャル・キャピタルを醸成させていくか、について具体的に検討していく必要がある。

## 謝辞

本稿は、(公財)北海道開発協会開発調査総合研究所 平成28年度研究助成の成果である。

本稿の作成に際しては、北海道内の18ヶ所のふれあいサロンを運営しているメンバー（町内会・自治会の役員、ボランティア・スタッフ等）の方々（下表参照）に、インタビュー調査や資料提供等のご協力をいただいた。

市町村	町内会・自治会	調査年月日	主な対応者
苫小牧市	柏木町町内会	2016年10月12日	田代副会長, 星福祉部長, 佐藤福祉部副部長
室蘭市	港町会	2016年11月2日	増岡会長
登別市	登別本町2町会	2016年11月4日	畠山会長, 畠山サロン代表
石狩市	花川南第3町内会	2016年11月8日	貝田会長, 花三民児グループ(藤田氏, 富本氏, 阿部氏)
恵庭市	島松寿町町内会	2016年11月10日	佐川総務部長, 渡部福祉部長
岩見沢市	駒園地区町会連絡協議会	2016年11月16日	石合会長, 高松サロン代表, 広川サロン副代表
登別市	新生町望洋町内会	2016年11月17日	水口会長, 大島福祉部長
中標津町	桜ヶ丘町内会	2016年11月26日	西尾副会長(サロン会長), 岡田サロン副会長
岩見沢市	やまと町内会	2016年12月6日 2017年1月10日	吉田会長, 花木総務部長
登別市	美園南町内会	2016年12月18日	岸会長, 松川福祉婦人部長
帯広市	タウン24町内会	2017年1月17日	松田会長, 葛谷つつじ24町内会長
千歳市	白樺町内会	2017年2月6日	丸山会長
洞爺湖町	洞爺湖温泉8区自治会	2017年2月18日	福井会長
帯広市	啓北連合町内会	2017年2月27日	鈴木会長
岩見沢市	緑が丘地区町会連絡協議会	2017年3月6日	市原ふれあい推進部長, 梶田グリーン団地町内会長
上ノ国町	扇石町内会	2017年3月11日	古舘会長
遠軽町	南町第2自治会	2017年3月17日	柿丸会長, 若杉サロン事務局長
遠軽町	金山通自治会	2017年3月17日	舟木会長

また、各市町村の町内会連合会・自治会連合会等の事務局の皆様にも、インタビュー調査の日程調整や資料提供等のご協力をいただいた。さらに、(一社)北海道町内会連合会の吉村美由紀氏にも、資料提供等のご協力をいただいた。関係各位に深く感謝する次第である。

なお、本稿において、事実誤認や解釈の相違があれば、それはすべて筆者の責に帰すべきものである。

## 参考文献

- 埴淵知哉・市田行信・平井寛・近藤克則 (2008) 「ソーシャル・キャピタルと地域—地域レベルソーシャル・キャピタルの実証研究をめぐる諸問題」、稲葉陽二編著『ソーシャル・キャピタルの潜在力』、日本評論社：55-72.
- 桧垣牧子・福田由美子 (2005) 「『ふれあい・いきいきサロン』事業の考察—高齢者の生活拠点施設に関する研究」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 (近畿)』：315-316.
- 飯田詠子・初見学 (2008) 「都市におけるコミュニティ形成の場に関する研究—コミュニティカフェの運営形態を通して—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国)』：331-332.
- 一般社団法人北海道町内会連合会 (2016) 『ひとりの不幸もみのがさない住みよいまちづくり全道運動 平成 27 年度実践地区実施報告書』.
- 入川ひとと (2012) 『カフェが街をつくる』、クロスメディア・パブリッシング.
- 紙屋高雪 (2017) 『どこまでやるか、町内会』、ポプラ社.
- 小松一子 (2005) 「高齢者の『閉じこもり予防』『介護予防』事業とソーシャル・サポート—宇治市のふれあいサロン・地域参加型リハビリ事業の調査から—」、『同志社社会福祉学』19：94-103.
- 黒岩亮子 (2004) 「『ふれあい・いきいきサロン』の変容と課題—東京都世田谷区の事例から—」、『社会福祉』45：89-99.
- 松井順子 (2014) 「ふれあい・いきいきサロンの有効性と課題に関する考察—宝塚市の実践例から—」、『大阪千代田短期大学紀要』43：82-93.
- 森常人 (2008) 「高齢者を対象とした地域社会での人間関係の構築と生きがいの形成のための一考察—ふれあい・いきいきサロンと小地域交流サロンによる事例をもとに—」、『政策科学』16(1)：87-101.
- 森常人 (2014) 「『ふれあい・いきいきサロン』の参加者評価の分析に関する一考察」、『関西外国語大学研究論集』100：257-270.
- 森永夕美・後藤多美子・江川美由紀 (2011) 「高齢者と介護福祉学生との連携による地域活性」、『成美大学短期大学部紀要』39(1)：21-34.
- 中村久美 (2008) 「地域コミュニティとしてのふれあい・いきいきサロンの評価とそのあり方」、『日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国)』：25-26.
- 中村久美 (2009) 「地域コミュニティとしての『ふれあい・いきいきサロン』の評価」、『日本家政学会誌』60(1)：25-37.
- 中田実 (2012) 「第 4 章 地域総合力で地域再生に向かう町内会・自治会」、中田実・山崎丈夫・小木曾洋司『増補版 地域再生と町内会・自治会』、自治体研究社：87-113.
- 坂倉杏介・保井俊之・白坂成功・前野隆司 (2013) 「『共同行為における自己実現の段階モデル』による『地域の居場所』の来場者の行動分析—東京都港区『芝の家』を事例に—」、『地域活性研究』4：23-30.
- 社団法人長寿社会文化協会編 (2007) 『コミュニティ・カフェをつくろう!』、学陽書房.
- 椎名知づる・朴賢晶 (2009) 「要支援の高齢者がふれあいサロンに適應していくプロセスにおける支援者の役割」、『介護福祉学』16(2)：244-253.
- 菅原浩信 (2013a) 「北海道におけるコミュニティ・カフェのマネジメント」、『開発こうほう』598：43-47.
- 菅原浩信 (2013b) 「コミュニティ・カフェによる地域コミュニティの活性化」、『日本フードサービス学会年報』18：38-52.
- 菅原浩信 (2014) 「コミュニティ・カフェが北海道を変える?—地域が元気になるために—」、公益財団法人北海道生涯学習協会『平成 26 年度 道民カレッジ「ほっかいどう学」大学インターネット講座』:

60-66.

菅原浩信 (2015) 「商店街組織によるコミュニティ・カフェのマネジメント」、『地域活性研究』6 : 126-135.

菅原浩信 (2017) 『『ふれあいサロン』のネットワーク化に関する考察』、『開発論集』99 : 1-14.

高野和良・坂本俊彦・大倉福恵 (2007) 「高齢者の社会参加と住民組織～ふれあい・いきいきサロン活動に着目して～」、『山口県立大学大学院論集』8 : 129-137.

徳村光太・大江守之 (2008) 「＜弱い専門システム＞としてのコミュニティ・カフェー横浜市戸塚区ドリームハイツ『ふらっとステーション・ドリーム』を事例として」、大江守之・駒井正晶編著『大都市郊外の変容と「協働」－＜弱い専門システム＞の構築に向けて』、慶応義塾大学出版会 : 149-177.

富山居場所&コミュニティカフェネットワーク・公益社団法人長寿社会文化協会 (2010) 『コミュニティカフェ&居場所ガイドブック 富山県版』.

豊田保 (2008) 「参加者の視点からみた高齢者『ふれあい・いきいきサロン』の意義」、『新潟医福誌』8(2) : 16-20.